

Track5..カノジヨのしあわせ

「……おはよう」

「よく眠っていたわね。」

もうすぐお昼だけれど、どうする？

すぐ起きる？」

「あ……ごめんなさい。」

寝てる間も、あなたのを触ってしまったて……

いつもの癖でつい……」

「普段、硬いおちんちんしか触っていないから、

柔らかくなってるあなたの新鮮で……」

「でも、気をつけないといけないわよね。」

出先で無意識のうちに触ってしまったら、

大変なことになってしまうし……」

「前に、なぎささんと莉奈さんと、

4人でご飯を食べた時、

あなたに恥をかかせてしまうところだったもの」

「こっそり手を繋ごうとしたら、

あなたのに触れてしまって……」

「二人と仲良く話しているあなたを見ていたら、

急に、不安になってしまったの……」

「やっぱり、私にとって、
あなたの幼なじみであるあの二人は、
特別な存在みたい」

「反省しているわ。見えないところでは言葉、
二人と話をしている最中、
あなたに意地悪をしてしまって……」

「……たまに、自分でもどうしたらいいか、
わからなくなるの」

「だって、久しぶりに会ったら、
なぎささんたち……すごく綺麗になっていたから……」

「特に莉奈さんは、スタイルも良くて、
学生の頃とは比べ物にならないぐらい、
色っぽくなっていたでしょう？」

「私と違って、胸もすごく大きいし……
同じ女の私でも、見惚れてしまったもの……」

「あなたの気持ちを疑ったことはないけれど、
どうして私を選んでくれたんだろうって、
ちょっとしたことで不安になるの」

「あなたを好きになればなるほど、
その不安が大きくなって……すごく、胸が苦しくなる……」

「幸せな悩みよね。自分でも、そう思うわ」

「なぎささんや莉奈さんの話をしても、おちんちんが柔らかいままなのは、私のためにがんばってくれてるの？」

「さつきから、意地悪して触っていたのに、全然、反応しないから……」

「ふふっ。こういう時は我慢できちゃうの、ずるい。私は嬉しいけれど……ね？」

「……柔らかいおちんちんが、少しずつ硬くなっていくの、好き。本当に愛おしい……」

「でも誤解しないで？
こんな風に、いつもあなたに触っていると、ただ、おちんちんが好きな女に思われそうだけれど……」

「私はあなたのしか触ったことはないし、この先も他の人に触ることはない」

「あなたのおちんちんしか知らない女でいいの」

「あなたのだから、かわいくて好きなの」

「あなたも、あなたのおちんちんも」

「かわいい」

「ふふっ。あなたって、

私が『かわいい』って言うと、未だに照れるのね」

「学生の頃から、何度も言っているのに……」

「……かわいい」

「か、わ、い、い」

「かわいっ」

「ちゅっ……ちゅっちゅっちゅっ、ちゅっ……」

私ったらダメね。

一緒にいると、あなたにかまってばかりで……」

「迷惑だったら言ってほしい。

あなたも、一人でいる時間が欲しいでしょうし……」

「……何も言わずに髪を撫でてくるのもずるいわ」

「でも、嬉しい。あなたに髪を触られるの好きだから……」

「恋人なら、休日は外でデートをしたりするのが、普通なのかもしれないけれど……」

「こうしてあなたとくっついていて、
このまま、一日が終わってもいいって思えるの……」

「私は、学生の頃からあなたを
ダメな男の子にしたかったけれど、
いつの間にか、私もダメにされていたのね」

「……私の目標は、世界一のマラソン選手になること」

「でも、あなたの前では、
世界一かわいい女の子でいたい」

「あなたからも、たくさん……
かわいいって言ってもらいたいから……」

「あなたは今、幸せ？
となりにいるのが、本当に私でよかった？」

「……私の幸せは、ここにあるわ。
ううん、『ここにも』ある」

「マラソンで、あなたの背中を見て走っている時も、
お風呂であなたの背中を洗っている時も」

「こうやって、背中を守るように
あなたに抱いてもらっている時も」

「あなたには、たくさんの幸せをもらってる」

「あなたとお付き合いをして、
もう何年も経ったけれど……」

「今も私は、あなたに恋をしているわ」

「素敵な恋をありがとう」

「これからも、あなたのそばにいさせてね。
……ちゅっ」